

## 平成25年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター  
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し(平成25年8月~12月)のポイント

対象魚種：スルメイカ

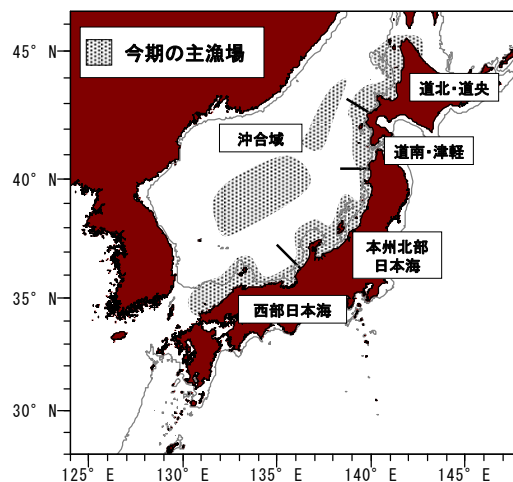
対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月~9月の北海道周辺が中心。  
10月以降は漁獲が低調となる。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

\* 近年は最近5年間(平成20年~平成24年)



### 問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

担当：関根、檜山

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

# 平成25年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2013年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

## 1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：近年平均を下回り、前年並み。

(2) 漁期・漁場：8月～9月が中心。10月以降は漁獲が低調となる。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

## 2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：近年平均を下回り、前年並み。

(2) 漁期・漁場：10月以降は漁獲が低調となる。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

## 3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：近年平均および前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：好漁場が形成される状況にない。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

## 4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：近年平均および前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：好漁場が形成される状況にない。

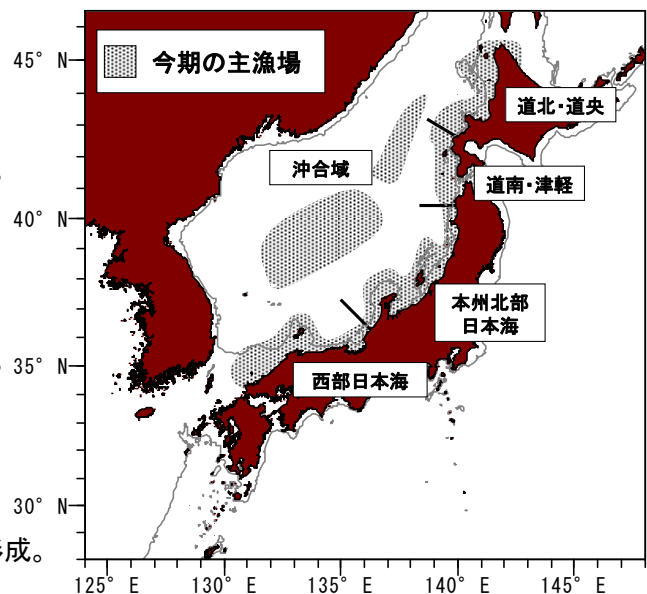
(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

## 5. 沖合域（いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：近年平均を下回り、前年並み。

(2) 漁期・漁場：9月～10月は北海道沖に漁場が形成。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。



\* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

\*\* 近年平均は最近5年間（2008年～2012年）の平均、前年は2012年を示す。

## I 予報の説明

2013年6月までの漁況の経過、6月下旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成25年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

### 1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7月～8月と11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【情報および調査結果】日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、今年の当海域の分布状況は外套背長16cm～18cm台のサイズを中心に道北海域では前年よりも多かった。今年6月の当海域の漁獲量は前年および近年平均よりも少なかった。当海域に来遊する冬季発生系群の資源状況は前年を下回ると予測されている。

【予報の説明】日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果から当海域への秋季発生系群の来遊量は前年よりも多いと予測される。しかし、冬季発生系群が漁獲対象となる10月以降は前年同様、低調となると予測されていることから、漁期・漁場は8月～9月が中心で、魚体は近年平均並みと予想される。

### 2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークである。さらに、太平洋側から冬季発生系群の来遊によって11月～12月にもう一つのピークが出来る場合がある。近年、6月～8月の漁獲量は減少傾向にある。

【情報および調査結果】日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、当海域への来遊は前年よりも少なかった。一方、今年6月の当海域の漁獲量は近年平均よりも多かったものの、前年よりは少なかった。秋季発生系群の資源状況は前年を下回ると予測されている。

【予報の説明】6月の漁獲状況から、8月～9月も近年平均および前年並みの漁獲が予測されるものの、冬季発生系群が漁獲対象となる10月以降は前年同様、低調となることが予想される。

### 3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

近年の本州北部日本海では、5月～7月が漁期の中心であり、8月以降に当海域で好漁場が形成される状況にない。

【情報および調査結果】今年は5月下旬以降、表面水温が高かったことから魚群の北上が早かった。そのため、当海域の5月の漁獲量は近年平均および前年よりも多かったものの、6月は近年平均および前年よりも少なかった。また、日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果でも当海域では分布密度が低かった。

【予報の説明】2013年7月の当海域の沿岸域の水温は高く、当海域におけるスルメイカの分布密度も低かったことから、今期は好漁場が形成される状況にない。

### 4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に主に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は沿岸域に魚群が来遊しにくく、漁獲量が伸びない傾向がある。

【情報および調査結果】日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、資源量指数が近年平均および前年よりも少なかった。また、当海域の今年6月の漁獲量は近年平均よりも少なかった。

【予報の説明】日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、日本海への来遊尾数が近年平均および前年よりも少なく、近年は高水温傾向にあることから、当海域の沿岸域では漁場が形成されにくい状況にある。よって、当海域では今期は好漁場が形成される状況にない。

### 5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では大和堆付近が主漁場であり、8月下旬～9月以降には北海道沖の武蔵堆付近にも漁場が形成される。近年は魚体が小さいため、漁期のピークが遅く、漁場が北偏化する傾向も認められている。

【情報および調査結果】日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では資源量指数が近年平均および前年よりも少なかったものの、道北海域では外套背長16cm～18cm台のサイズ、大和堆付近では外套背長21cm以上のサイズを中心に分布密度の高い調査点があった。

【予報の説明】資源量指数が近年平均を下回っており、当海域への来遊量は近年平均を下回ると予想される。なお、小型個体が道北海域に多く分布していたことから、9月～10月は北海道沖で漁場が形成される見込み。

## Ⅱ 予報に用いた主要な情報および調査結果

### 1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、イカ釣りによる試験操業（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。

#### 1) 分布状況（図1）

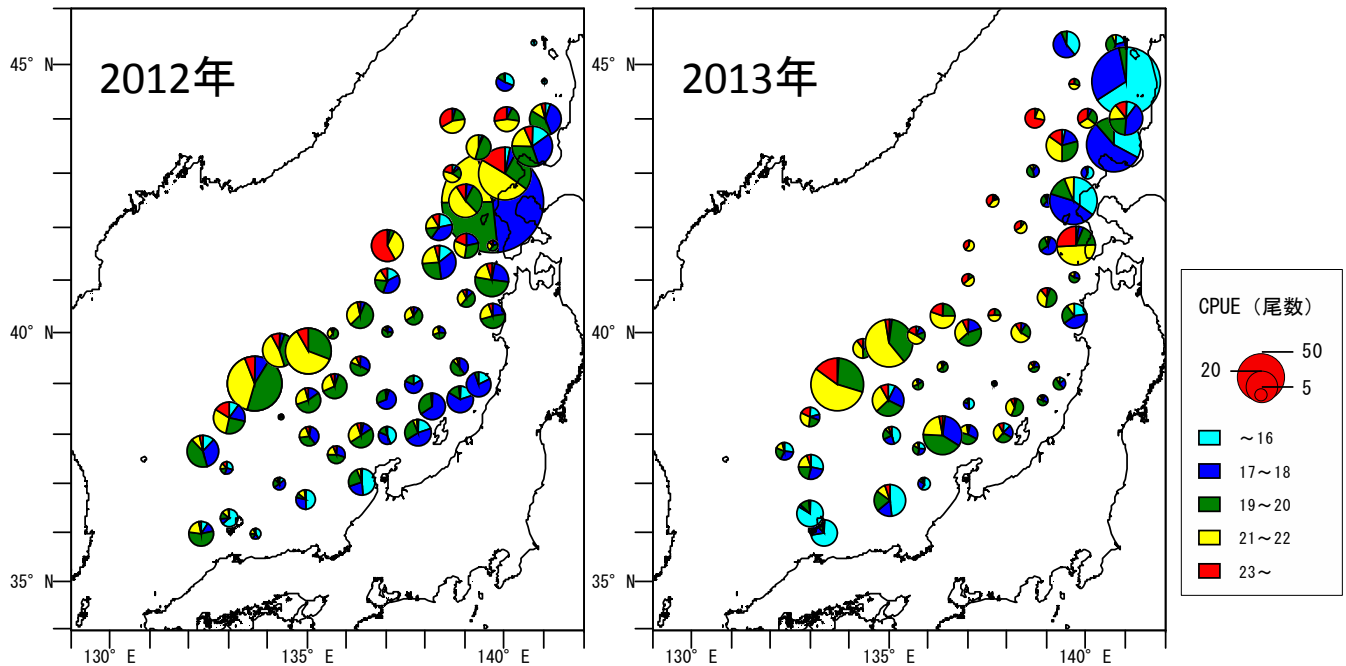


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す。

- (1) 道北海域では前年と異なり、外套背長16cm台～18cm台の小型のサイズを中心に分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）が50尾以上の高い調査点があった。
- (2) 道南・津軽海域で前年のようにCPUEが100尾を超える非常に分布密度の高い調査点はなかったものの、CPUEが20～50尾の比較的分布密度の高い調査点があった。
- (3) 本州北部ではCPUEが主に10尾未満であり、分布密度が低かった。
- (4) 西部日本海でもCPUEが主に5尾～20尾前後であり、分布密度が高い調査点がなかった。魚体の大きさも16cm台のサイズが中心であった。
- (5) 沖合域では、CPUEが20～50尾の分布密度が比較的高い調査点があり、大和堆付近ではCPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点もあった。魚体の大きさは21cm台の大型のサイズが多かった。

### 2) 資源量指数

日本海漁場一斉調査において、釣獲試験を行った全調査点のCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）の平均値を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数は1970年代後半に減少し、1980年代は5尾前後の低い値となったが、1990年代には増加し、10尾～20尾となった（図2）。資源量指数は2002年に最も高くなった（25.04尾）ものの、2003年以降は15尾前後で推移している。2013年の資源量指数は14.12尾であり、前年（17.32尾）の82%、および近年平均（17.56尾）の80%であった。

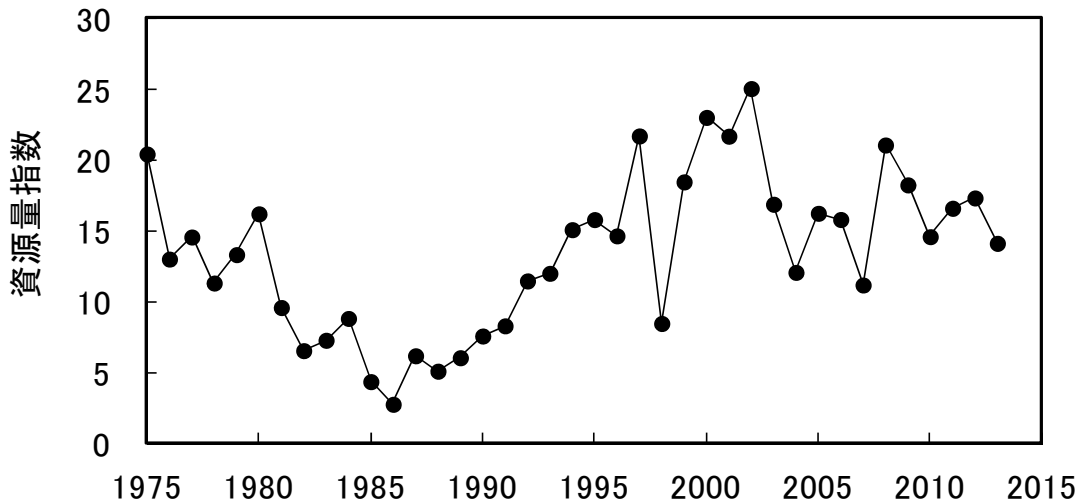


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数の変化

### 3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2013年は17cm台と21cm台にモードがある2峰型の組成であった。外套背長16cm以下のサイズは前年よりも多く、近年平均並みであった。一方、外套背長21cm以上のサイズは前年よりも少ないものの、近年平均より多かった。2013年は、外套背長18cm～20cm台のサイズが前年および近年平均よりも少なく、その結果全体の組成が2峰型となった。

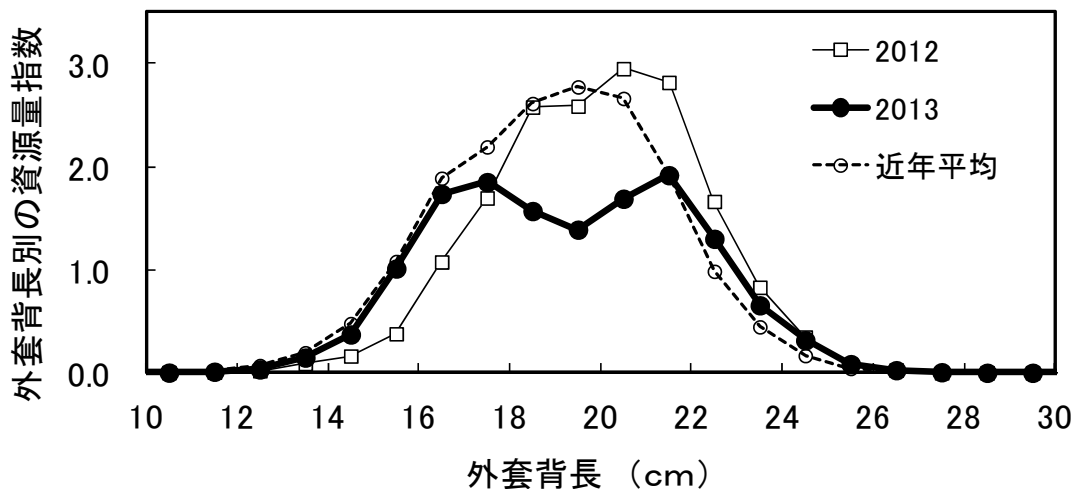


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成  
各外套背長階級の値は釣り機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す。

## 2. 2013年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2013年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2013年は5月下旬以降、日本海沿岸の水温が高い傾向となり、5月の漁獲量は西部日本海で伸び悩んだものの、本州北部では近年平均および前年よりも多かった。6月の漁獲量は本州北部で前年および近年平均よりも少なかったものの、道南・津軽では近年平均よりも多かった。

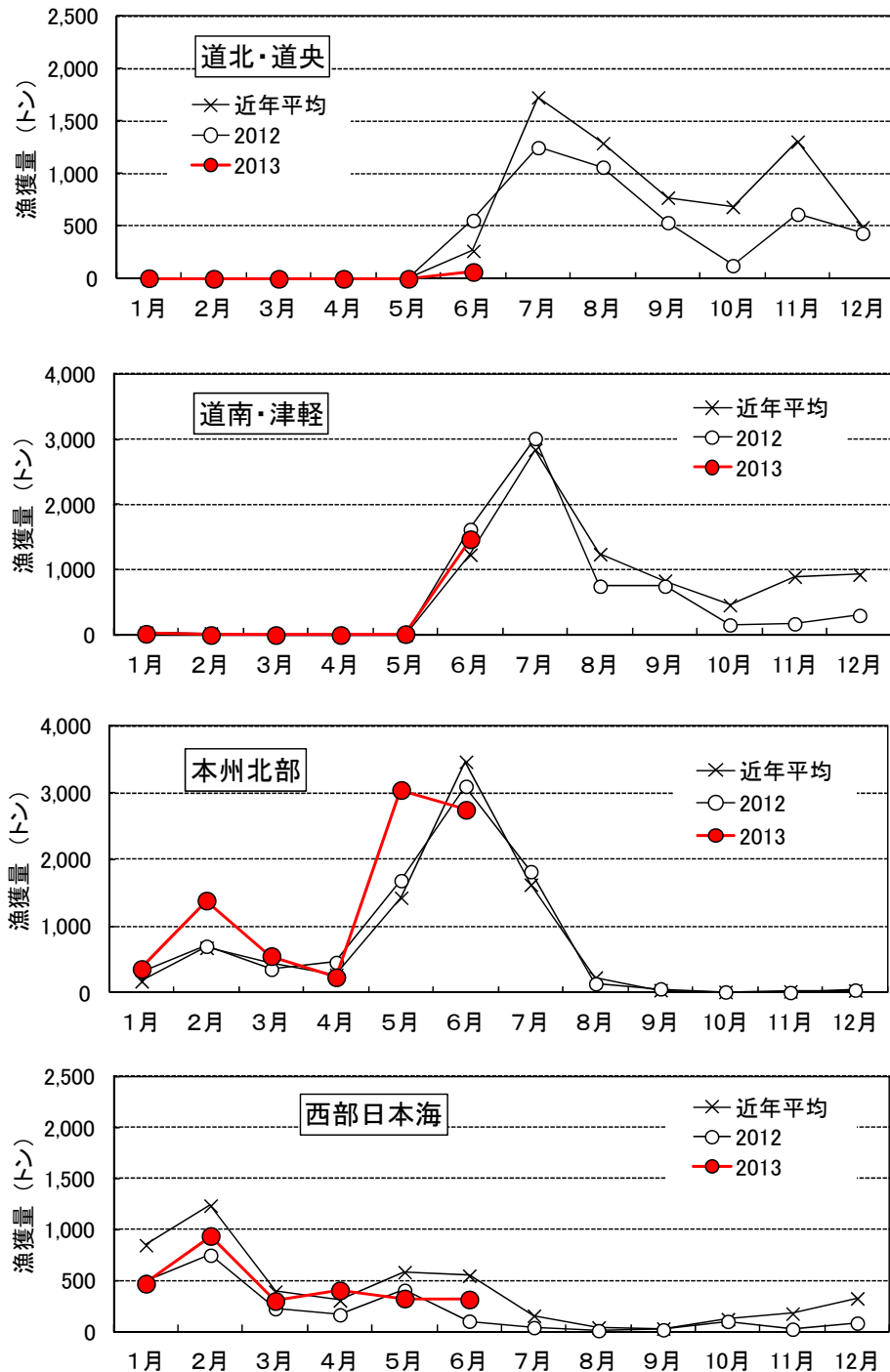


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量 (トン)

各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成 (一部未集計)。

## 3. 太平洋側 (冬季発生系群) の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成25年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、太平洋側の冬季発生系群の資源状況は前年を下回ると予測されている。

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
	(取りまとめ機関)
	独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所